

二葉館の玄関から大広間へと足を踏み入れると、光に映えるステンドグラスと華麗な螺旋階段に目を奪われることでしょう。今回は螺旋階段についてご紹介します。

東二葉町（現在の名古屋市中区白壁三丁目）に建てた貞奴邸は、創建当時は迎賓館の役割とし、その後形を変えて保養施設として使われていました。平成12年に解体され、平成17年に現在の文化のみち二葉館として移築・復元されました。その際に行われた聞き取り調査において、この螺旋階段は「木製のぐるっと廻る階段で空中に浮いており、外人も驚いていた」とのことだったようです。おそらく創建当時は、一気に2階へと上がる廻り階段だと考えられました。空中に浮いていたとは、周囲の壁などに支えられていなかった、ということだったと思われるます。復元にあたり、建築基準法の適用を受けることや、2階を活用する利便性から、当時の雰囲気を最大限考慮しながら設計が進められました。



華麗な螺旋階段



2階 階段廻り

## 二葉館 あれこれ Vol.8 大広間の螺旋階段

そして、復元された螺旋階段には、中間に踊場が設けられました。踊場から下は廻り階段、上は直線階段として、もとの形状に留意した、利用しやすい階段へとよみがえったのです。

お客様から時折「この螺旋階段は柱がないけれど、どういう構造になっているのですか」というご質問を受けます。実は、中は鉄骨で組み立てられ、表面はナラ材によって造作が施されています。そのため、中間に柱がなくても頑丈なつくりになっているのです（支持金物で2箇所固定されています）。

また、2階の階段廻りにある3台の照明器具は、創建当時に使用していたオリジナルのものを修理して取り付けられました。モダンなデザインが、より一層階段を華やかにしていると思いませんか。ちなみに階段上り口の親柱の2台は、レブリカです（創建当時は何台の照明器具があったのか定かではありません）。かつて貞奴は、螺旋階段から下りてきて、大広間に用意された舞台で踊りなどを披露したそうです。是非、皆さんも貞奴のように、赤い絨毯が敷かれたこの階段で記念写真を撮ってみたいかがでしょうか。 ※9月にイベント「気分は貞奴」を開催します。詳しくは裏面をご覧ください。

## IRODORI いろどり

文化のみち二葉館は、関係各所への聞き取り調査や所有している古写真、新聞・雑誌などの文献資料などを基に復元されています。今回は建物の北側で撮られた古写真についてご紹介いたします。



創建当時の様子

※写真の人物は貞奴の養女・川上富司氏の弟と妹

**正面玄関の北側を背景にした写真**  
創建当時の建物の北側（現在の東側）の様子を知ることが出来る唯一の写真です。1階左手奥は手洗い場、その右側には書生部屋がありました。手洗い場は瓦屋根、書生部屋は銅板瓦屋根で、勾配も違っていましたがわかります。



現在の様子

2階には奥から浴室、支那室、ペランダがあり、支那室と同じデザインの窓がペランダ側へ続いていることがわかります。また、ペランダには鉄鉄と思われる格子と人造石の壁がありました。さらに、外壁には排水用の箱樋が回っていたことや、浴室の小屋裏タンクへの給水と思われる配管も確認できます。復元にあたり、施設活用のために一部変更されたところもありますが、それ以外当時の様子に近い形で復元されました。



4月13日（金）午前、平成17年2月8日開館以来の来館者が50万人に到達しました。50万人目のお客様には館長より認定書、花束、年間入館券などが贈呈されました。皆様にもますますご来館いただける「文化のみち二葉館」であるように、スタッフ一同精進してまいりますので、これからも、どうぞよろしくお願いたします。

「ふたば便り」第26号（2018年1月4日発行）記事に誤りがありました。訂正をしてお詫び申し上げます。訂正内容  
【誤】 貞奴と桃介の間に座っている女の子は、桃介の孫（長男・駒吉の娘）。  
【正】 貞奴と桃介の間に座っている女の子は、桃介の孫（次男・辰三の娘）。

**入館者数が50万人に到達しました！**

## 文化のふらり さんぽ 番外編 8 「福沢桃介記念館と桃介橋」



福沢桃介記念館

今回は福沢桃介生誕150年を記念して、桃介ゆかりの地についてご紹介いたします。電力王と呼ばれた福沢桃介は、大正8年から15年にかけて木曾川に7カ所の水力発電所を建設しました。

桃介は木曾における電源開発の基地として、大正8年に旧読書村（現在の長野県木曾郡南木曾町）に別荘を建てました。桃介と、事業パートナーである川上貞奴は、大井発電所が完成する大正13年まで頻繁にこの別荘に滞在し、読書や大井などの発電所建設現場に足を運んだり、政財界の実力者や外国人技師などを招いては華やかな宴を催していたそうです。

当時は大同電力1号社宅と呼ばれて、後に池を配し、隣には渡り廊下で2号社宅を従えた、堂々たる構えの建物でした。レンガ造りにモルタル仕上げの2階建ての建物は、マントルピースを備えた本格的な西洋建築で、山深い木曾谷にひときは異彩を放っていました。しかし、長い年月のうちに池が埋められ、周辺の建物は取り壊され、別荘自体も昭和35年の火災により2階部分を焼失してしまいました。その後、昭和60年からは平屋のまま「福沢桃介記念館」として一般公開されていましたが、平成9年度に2階部



桃介橋

分が復元されました。館内では桃介や貞奴のゆかりの品や発電所建設の資料などが展示されています。桃介記念館から歩いて5分ほどのところに「桃介橋」があります。この橋は下流の読書発電所への建設用資材運搬路として大正10年から翌年の9月にかけて建設されました。全長247m、幅2.7mの木造の吊り橋で、この付近では最大川幅のところにあり、美しく雄大な景観を誇っていました。また、橋の中央には資材運搬用のトロツコのレールが敷かれていました。

昭和25年に旧読書村に寄付され、地域の交通に大いに役立っていました。昭和53年頃からは老朽化のため使用が中止され、廃橋の危機を迎えます。しかし、平成5年に南木曾町のふるさと創生事業である「大正ロマンを偲ぶ桃介記念公園整備事業」の一環として復元され、再び通行できるようになりました。そして、平成6年12月には読書発電所施設発電所・柿其水路橋・桃介橋として、日本の発電所では初めて国の重要文化財に指定されました。福沢桃介記念館  
【所在地】長野県木曾郡南木曾町読書  
【休館日】毎週水曜日、冬期（12月1日～3月中旬）

## from Archive 書庫棟から

### 児童文学



今も昔も子どもたちはまず、家庭や育児教育の場などでの読み聞かせによって、物語と出会います。物語の世界に思いを巡らせることで想像力が養われ、本に対する興味も生まれます。やがて文字が読めるようになると、自分で本を選び、読書を楽しむようになります。成長に応じて手に取る本は変わっていきますが、子どもの頃に読む本は、その後の暮らしや人生に影響を与えうる、大切なものなのかもしれません。

これまで二葉館では、様々な児童文学を紹介してきました。「クレヨン王国」シリーズの著者である福永令三作品展、劇作家としても活躍した、しかたしんの作品や代表作「やまとたける」で古事記を題材に独自の視点でヤマトタケル伝説を書いた阿久根治子など、郷土の児童文学

作家を採り上げました。

昨年の夏にリバイバル展を行った新美南吉は、愛知県半田市出身の作家としてお馴染みですね。南吉の代表作として、長年教科書に掲載されている「こんぎつね」は、皆さんご存知の通り、悲しい物語です。そのようなお話を通じて、子どもたちは情緒豊かな心を育んでいくのでしょうか。

そして、今年の夏は『ぼくらの七日間戦争』（角川書店 1985年）の著者である、宗田理さんについてご紹介いたします。子どもたちが、教育のゆがみに仲間と共に立ち向かうストーリーは、現代の子どもたちにも大人気です。今回の展示では「ぼくら」シリーズをはじめ、ほかの宗田作品もお読みいただくことができます。ぜひ夏休みには家族で二葉館へお出かけください！

写真上:宗田理『ぼくらの七日間戦争』角川つばさ文庫  
写真下:宗田理『2年A組探偵局 ぼくらのロンドン怪盗事件』角川つばさ文庫